志木市の文化財　第32集

志木市遺跡群12

田子山遺跡第69地点

西原大塚遺跡第47地点

2002

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長　細田信良

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域の地形は大まかに、北東部が荒川の形成した荒川低地、南西部が武蔵野台地になっています。そして、その武蔵野台地の縁辺部を中心に、埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が少なからず存在しており、現在までに16遺跡が確認されています。

本来、こうした貴重な埋蔵文化財は、現状のまま後世に伝えるのが望ましいのですが、土木工事等で現状保存が困難な場合は、代替措置として、記録保存のための発掘調査を行うことになっています。

近年、志木市では、宅地開発や各種の開発行為が盛んに行われ、様々な企業の進出などを通し、その姿を急速に変化させています。特に、志木駅周辺の整備も着々と進み、数年ぶりで志木市を訪れる方々はおそらくその急変に驚かされることと思われます。これにより、今後さらなる人口の増加や各種開発の増大が予想されることでしょう。

しかし、事業者が個人であって、その人が専用に用いる住宅建設などは、その発掘調査の費用負担などについて、様々な困難な問題がありました。そのため、志木市では、1987（昭和62）年から、国庫及び県費の補助金の交付を受けて調査を進めております。

ここに刊行する『志木市遺跡群12』は、国庫・県費補助事業として、志木市教育委員会が、平成12年度に実施した市内遺跡発掘調査事業の調査成果を収録したものです。

平成12年度は、確認調査・発掘調査等を併せ、27地点の調査を実施しましたが、本書は、この中で発掘調査を実施した田子山遺跡第69地点、西原大塚遺跡第47地点の調査成果を主にまとめています。

以上のように、開発に先立ち発掘調査が実施され、本書が刊行できましたことは、ひとえに関係各位のご理解とご協力の賜物と厚く御礼申し上げる次第です。

最後に、本書が郷土の歴史研究のために広く活用され、多くの方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を深めることに役立つことができますよう切に願っております。

例　言

1．本書は、埼玉県志木市に所在する遺跡群の平成12年度の発掘調査報告書である。

2．発掘調査・整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け実施した。発掘調査は、平成12年4月1日より平成13年3月30日までの期間を対象とした。

3．本書の作成において、執筆は以下のように分担して行い、編集は執筆者が行った。

尾形則敏　第1章、第2章第1節・第2節の遺物、第4章

深井恵子　第2章第2節の遺構

佐々木保俊　第3章

4．遺構・遺物に関する実測及びトレース・写真撮影は以下のように行った。

○田子山遺跡第69地点

遺物実測	鎌本あけみ・星野恵美子・松浦恵子
遺構・遺物のトレース	深井恵子
写真撮影	尾形則敏

○西原大塚遺跡第47地点

遺物実測	佐々木保俊
遺構・遺物のトレース	佐々木保俊
写真撮影	佐々木保俊

5．本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水糸レベルは、海抜標高を示す。

○ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

○遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

S＝縄文時代の集石　H＝古墳時代～平安時代の住居跡　M＝溝跡　P＝ピット

6．調査組織

調査主体者　志木市教育委員会生涯学習部生涯学習課文化財保護担当

教育長	細田　信良
生涯学習部長	谷合　弘行
生涯学習課長	土橋　春樹
生涯学習課長補佐	金子　雅佳
文化財保護担当主査	関根　正明
〃	佐々木保俊
文化財保護担当主任	新井由起子
〃	尾形　則敏

志木市文化財保護委員（5名）

神山　健吉（委員長）・井上　國夫（副委員長）・高橋　長次・高橋　豊・内田　正子

7．発掘調査及び整理作業参加者

○田子山遺跡第69地点

調査担当者　尾形則敏

発掘調査員　深井恵子

発掘協力員　足立裕子・阿部公子・阿部ふみ子・岩森　都・遠藤英子・鎌本あけみ・高田美智子・塚田和枝・久留浪子・星野恵美子・松浦恵子・松崎陽子・山口優子・吉谷顕子

整理協力員　遠藤英子・鎌本あけみ・高田美智子・星野恵美子・松浦恵子・山口優子

○西原大塚遺跡第47地点

調査担当者　佐々木保俊

発掘調査員　内野美津江

発掘協力員　岸田純一

8．各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま資料館・朝霞市教育委員会・新座市教育委員会・和光市教育委員会・朝霞市博物館・富士見市立水子貝塚資料館・志木市立郷土資料館・志木市立志木第三小学校・志木市立宗岡小学校

会田　明・浅野晴樹・荒井幹夫・石井　寛・飯田充晴・井上洋一・岩田明広・上田　寛・碓井三子・江原　順・岡本東三・織笠明子・織笠　昭・柿沼幹夫・加藤秀之・片平雅俊・隈本健介・栗島義明・栗原和彦・小出輝雄・肥沼正和・小滝　勉・小宮恒雄・小林寛子・斉藤欽延・笹森健一・笹森紀巳子・斯波　治・白石浩之・実川順一・鈴木一郎・鈴木加津子・鈴木重信・鈴木正博・隅田　眞・高橋　学・田代　隆・田中英司・田中広明・坪田幹男・照林敏郎・中島岐視生・荻木　隆・根本　靖・野沢　均・土師由美・早川　泉・早坂廣人・廣田吉三郎・福田　聖・藤波啓容・堀　善之・松本　完・松本富雄・水口由紀子・三田光明・村上伸二・柳井彰宏・山田尚友・柳田敏司・和田晋治

田 子 山遺跡第69地点（開発主体者　個 人）

西原大塚遺跡第47地点（開発主体者　個 人）

目　次

はじめに

例　言

目　次

挿図目次

表 目 次

図版目次

第１章　平成12年度の調査成果 …… 1

　第１節　市域の地形と遺跡 …… 1

　第２節　調査に至る経過 …… 6

第２章　田子山遺跡第69地点の調査 …… 8

　第１節　遺跡の概要 …… 8

　第２節　検出された遺構と遺物 …… 10

第３章　西原大塚遺跡第47地点の調査 …… 20

　第１節　遺跡の概要 …… 20

　第２節　検出された遺構と遺物 …… 21

第４章　まとめ …… 23

図　版

報告書抄録

挿図目次

第1図　市域の地形と調査地点（1／20000）…… 2
第2図　周辺の地形と調査地点（1／5000）…… 8
第3図　遺構分布図（1／200）…… 9
第4図　4号集石（1／30）…… 10
第5図　61号住居跡（1／60）…… 11
第6図　61号住居跡遺物出土状態（1／60・1／9）…… 11
第7図　61号住居跡カマド（1／30）…… 12
第8図　61号住居跡出土遺物（1／4）…… 13
第9図　62号住居跡（1／60）…… 14
第10図　62号住居跡遺物出土状態（1／60・1／9）…… 14
第11図　62号住居跡カマド（1／30）…… 15
第12図　62号住居跡出土遺物（1／4）…… 16
第13図　2号溝跡（1／60）…… 18
第14図　遺構外出土遺物（1／1）…… 19
第15図　周辺の地形と調査地点（1／5000）…… 20
第16図　遺構分布図（1／200）…… 21
第17図　378号土坑・25号溝跡（1／60）…… 21
第18図　25号溝跡・遺構外出土遺物（1／3）…… 22
第19図　田子山遺跡の古墳時代後期の土器集成1（1／8）…… 24
第20図　田子山遺跡の古墳時代後期の土器集成2（1／8）…… 25

表目次

第1表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧…… 1
第2表　平成12年度調査地点一覧…… 4

図版目次

図版1　田子山遺跡第69地点
1．調査区近景　2．確認調査風景　3．4号集石調査風景　4．4号集石
5．61号住居跡発掘風景　6～8．61号住居跡遺物出土状態
図版2　田子山遺跡第69地点
1．61号住居跡炭化材出土状態　2．61号住居跡　3．61号住居跡カマド
4．61号住居跡カマド（掘り方）　5～8．62号住居跡遺物出土状態
図版3　田子山遺跡第69地点
1．62号住居跡カマド　2．62号住居跡カマド土層断面
3・4．62号住居跡カマド遺物出土状態　5．発掘風景　6．2号溝跡発掘風景
7．2号溝跡
図版4　田子山遺跡第69地点
1．61号住居跡出土遺物　2．62号住居跡出土遺物1　3．62号住居跡出土遺物2
図版5　田子山遺跡第69地点
1．62号住居跡出土遺物3　2．線刻土器　3．遺構外出土古銭　4．2号溝跡出土遺物
図版6　西原大塚遺跡第47地点
1．調査区近景　2．発掘調査風景　3．378号土坑　4．25号溝跡
5．25号溝跡・遺構外出土遺物

第１章　平成12年度の調査成果

第１節　市域の地形と遺跡

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりをもち、面積は9.06㎡、人口約６万６千の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の木町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の３本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡（７）、中道遺跡（５）、新邸遺跡（８）、城山遺跡（３）、中野遺跡（２）、氷川前遺跡（４）、市場裏遺跡（15）、市場遺跡（１）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）の順に名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、現在前述した14遺跡に塚ノ山古墳（６）、城山貝塚（９）を加えた16遺跡である（第１図）。

第１表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
1	市場	700 ㎡	宅地	遺物散布地	不明	地下式坑？	なし
2	中野	62,000 ㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄文（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器 土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	82,000 ㎡	畑・宅地	城館跡・集落跡	縄（早・中）、弥（後）、古（前～後）、奈良・平、中・近世	住居跡、土坑、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鋳造関連等	石器、縄文・弥生土器 土師器、須恵器、陶磁器等
4	氷川前	21,200 ㎡	畑・宅地	遺物散布地	古墳・平安？	なし	なし
5	中道	66,500 ㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄文（中）、弥（後）、古（後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、古銭、人骨、土師器、須恵器、陶磁器等
6	塚ノ山古墳	800 ㎡	林	古墳？	古墳？	なし	なし
7	西原大塚	231,400 ㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄文（前～晩）、弥（後）、古（前・後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、古銭 土師器、須恵器、陶磁器等
8	新邸	22,500 ㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡	縄文（前）、古（前）、中・近世	住居跡、土坑、井戸跡、溝跡、炭切状遺構、ピット群等	石器、縄文・弥生土器、古銭 土師器、陶磁器等
9	城山貝塚	900 ㎡	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	縄文土器、石器、貝
10	田子山	66,700 ㎡	畑・宅地	集落跡	縄（草創～晩）、弥生（後）、古（後）、奈良・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、ローム層掘遺構、溝跡、方形・円形周溝墓等	縄文・弥生土器、炭化種子、土師器、須恵器、陶磁器等
11	富士前	18,200 ㎡	宅地	集落跡	弥生（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 ㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 ㎡	グランド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 ㎡	田	館跡	中世	井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	19,200 ㎡	宅地	墓跡	弥生（後）～古（後）、近代	方形周溝墓	弥生土器、土師器、土師器
16	大原	1,700 ㎡	宅地	不明	近世以降？	溝跡	なし

平成13年12月28日現在

第1図　市域の地形と調査地点（1／20000）

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

志木市内に最初に人が住みついたのは、**旧石器時代**からで、この時代の遺跡としては、柳瀬川右岸の西原大塚・中道・中野遺跡がある。中道遺跡では、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパー・ナイフ形石器や安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

最近では、平成11～12年度に調査が実施された東京電力志木変電所の増設工事に伴う市野遺跡第49地点でも立川ローム層のⅣ層下部から、黒曜石・頁岩の石材の石核・剥片が約60点発見されている。

縄文時代になると、草創期では、城山遺跡から爪形文系土器１点、田子山遺跡から有茎尖頭器１点が出土している。早期では、田子山遺跡から撚糸文・沈線文・条痕文系土器、富士前・城山遺跡から撚糸文系土器が数点出土している。住居跡としては、西原大塚・新邸遺跡の前期黒浜式期のものが最古に位置付けられ、それぞれ１軒検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成２年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

遺跡が最も増加するのは、中期後葉の勝坂式～加曽利Ｅ式期である。西原大塚遺跡では、多くの住居跡が環状に配置する可能性のあることが指摘されている。その他、中道・城山・中野・田子山遺跡からも住居跡・土坑などが発見されている。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が１軒確認されるのみである。

さらに後期では住居跡も皆無で、唯一遺構から発見される例は、田子山遺跡184号土坑である。この土坑からは、下層から称名寺Ⅰ式期の土器、上層からⅡ式の特徴をもつ土器が出土している。晩期になると、中野・田子山遺跡から安行ⅢＣ式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では遺跡が希薄になる傾向にあるが、平成12年度の西原地区特定区画整理事業に伴う発掘調査により、後期の堀之内式期の住居跡１軒と遺物集中地点、晩期と思われる溝跡１本が検出されている。

弥生時代では、現在のところ、前・中期に遡る遺跡は存在しない。大部分が後期末葉から古墳時代前期にかけての遺跡であろうと考えられる。その中で、田子山遺跡第21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が200軒近く確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは、全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

当時の墓域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62（1987）年以降、西原大塚・市場裏・田子山遺跡の３遺跡から相次いで確認されており、集落跡との関連の中で今後注目されるであろう。古墳時代前期では、特に西原大塚遺跡10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に、畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。

さらに、最近では、平成11年度に西原大塚遺跡で発見された一辺20ｍを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が特筆すべきであろう。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の３要素の特徴を示す壺が出土しており、こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期

第２表　平成12年度調査地点一覧

番号	調査地点	所在地	面積(㎡)	確認調査日	調査期間	備考
1	中野遺跡 第49地点	柏町１丁目 1503－１他	490.00	なし。	平成12年 ２月21日 ～５月23日	第２工程。 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
2	西原大塚遺跡 第47地点	幸町３丁目 3153－１・３	86.12	３月21日	４月３日～ ４日	後述　第２章参照。
3	中野遺跡 第52地点	柏町１丁目 1471－７	102.78	４月14日		遺構・遺物は検出されなかった。
4	田子山遺跡 第69地点	本町２丁目 1726－１	121.32	４月24日	４月25日 ～５月10日	後述　第３章参照。
5	田子山遺跡 第70地点	本町２丁目 1698－８	66.12	４月25日		遺構・遺物は検出されなかった。
6	田子山遺跡 第71地点	本町２丁目 1698－32	70.09	４月25日		遺構・遺物は検出されなかった。
7	中野遺跡 第53地点	柏町１丁目 1484　37・38	87.00	５月29日		遺構・遺物は検出されなかった。
8	田子山遺跡 第72地点	本町２丁目 1688　４	64.74	６月22日		遺構・遺物は検出されなかった。
9	城山遺跡 第38地点	柏町３丁目 2627－10	120.38	なし。		現地踏査は７月25日に実施。 遺構・遺物は検出されなかった。
10	中道遺跡 第53地点	柏町５丁目 2984－３	132.25	８月21日		盛土保存適用。
11	城山遺跡 第39地点	柏町３丁目 2657－５	94.97	８月21日		盛土保存適用。
12	田子山遺跡 第73地点	本町２丁目 1742－５	169.92	８月28日		遺構・遺物は検出されなかった。
13	西原大塚遺跡 第48地点	幸町４丁目 3509－１	749.51	９月18日		遺構・遺物は検出されなかった。
14	中道遺跡 第54地点	柏町５丁目 2923	1,590.52	９月25日		盛土保存適用。
15	中野遺跡 第54地点	柏町１丁目 1511－１の一部	212.10	10月26日		遺構・遺物は検出されなかった。
16	西原大塚遺跡 (区画整理事業)	幸町２丁目 3066他２筆	510.00	なし。	10月30日 ～２月１日	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
17	田子山遺跡 第74地点	本町２丁目 1749－２	147.68	11月15日		遺構・遺物は検出されなかった。
18	西原大塚遺跡 第49地点	幸町３丁目 3113－１	175.36	11月16日		盛土保存適用。

番号	調査地点	所在地	面積（㎡）	確認調査日	調査期間	備考
19	西原大塚遺跡 第 50 地点	幸町３丁目 3114－１の一部	498.46	11月28日		盛土保存適用。
20	城山遺跡 第 40 地点	柏町３丁目 2660－８	76.32	12月７日		遺構・遺物は検出されなかった。
21	城山遺跡 第 41 地点	柏町３丁目 2627－４	140.33	なし。		現地踏査は12月12日に実施。 遺構・遺物は検出されなかった。
22	田子山遺跡 第 75 地点	本町２丁目 1690－６・14	118.44	12月15日		盛土保存適用。
23	城山遺跡 第 42 地点	柏町３丁目 2627－１他３筆	2,173.79	12月18日	２月23日～ ６月29日	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
24	中道遺跡 第 55 地点	柏町５丁目 2892－６・７	287.86	１月22日		遺構・遺物は検出されなかった。
25	田子山遺跡 第 76 地点	本町２丁目 1735－１・７～14	475.87	２月16日		盛土保存適用。
26	中道遺跡 第 56 地点	柏町５丁目 2910－１他７筆	4,918.56	２月20・21日	４月９日～11日	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施。
27	市場遺跡 第 19 地点	本町２丁目 1615－９	217.87	なし。		現地踏査は３月22日に実施。 遺構・遺物は検出されなかった。
合計			13,898.36			

から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する。中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。特に中道遺跡第19号住居跡は、５世紀中葉に比定され、市内最古のカマドをもつ住居跡として注目される。

５世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に６世紀後半から７世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的に古い５世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、６世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

現在、５世紀後半から７世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で130軒を越え、次いで中野遺跡で50軒、中道遺跡で15軒を数える。また、田子山遺跡では、６世紀後半以降に比定できるものと考えられる4.1×4.7ｍのやや不整円形で２ケ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が１基確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、田子山遺跡は、この時代を代表する遺跡として挙げることができる。この遺跡では、住居跡の他、掘立柱建築遺構、溝跡、100基を越える土坑群が確認されている。遺物としては、土器・灰釉陶器の他、腰帯の一部である銅製の丸鞆、鉄製の紡錘車・刀子などが出土している。

また、平安時代の城山遺跡128号住居跡からは、印面に「冨」1文字が書かれた銅製の印章が出土したことに注目される。この住居跡からはその他、緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。

中・近世では、柏城跡、関根兵庫館跡が代表される遺跡である。特に、柏城跡内での数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では平成13年3月から6月に城山遺跡第42地点の調査が実施され、柏城関連の大堀、そして多数の土坑・地下室・井戸跡などが検出されている。特筆すべき遺物としては、鉄鍋の完形品が234号土坑の坑底面から伏せた状態で出土している。

また、頭部及び上半部を欠く馬の骨が、城山遺跡第29地点の127号土坑から検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）が出土しており、特に、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、鋳造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。

近代以降の遺跡では、田子山遺跡の富士塚築造に関連するローム採掘遺構が検出されており、地域研究の重要な資料であると言える。

第2節　調査に至る経過

志木市は、都心から25km圏内に位置し、東武東上線志木－池袋駅間を急行で20分という交通の便に恵まれ、都心近郊のベッドタウンとして発展してきた。近年の都市化に伴い、各種の開発行為も増大してきたが、とりわけ住宅建設の占める割合が高く開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺跡の集中する本町・柏町・幸町地区は都市化の最も進展する地域になっていることも遺跡破壊の事態を一層大きくしていると言える。

こうした状況の中、志木市教育委員会では文化財行政を進めていくために、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっている。しかしながら、開発により遺跡の現状保存が困難な状況であり、記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

ここで、志木市における発掘調査の経過を振り返ってみると、まず、1973（昭和48）年に西原大塚遺跡において発掘調査が実施されたのが最初の調査であろう。そして以後、1982（昭和57）年までは、志木市史編さん事業に伴う学術的な発掘調査が実施されていた。1983（昭和58）年には、志木市において遺跡調査会が組織され、1985（昭和60）年には当市にとって最大規模の調査となった城山遺跡第1地点の調査が実施された。この調査は、市内における発掘調査体制の本格的組織化の契機となり、以降志木市の埋蔵文化財保護を推進する上で大きな転換となったと言える。

そうした中、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多いことから、こうした小規模の開発にも対応する必要があった。しかし、小規模な開発の当事者は個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など記録保存を進める上で困難な点が多かった。そのため、1987（昭和62）年以降、国・県よりの補助金の交付を受け、志木市教育委員会を主体とした発掘調査を実施することになったのである。さらに、民間・公共事業を問わず確認

調査については、すべて公費で対応し、開発事業者の負担軽減と埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布状況の把握を積極的に進めている。特に、発掘調査件数及び面積が、1987（昭和62）年以降急激に増加しているのは、こうした理由によるものと考えられる。

最近では、昭和40年前後の人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、平成２年度以来、個人住宅建設に伴う調査件数が増加してきている。また、平成８年度は全体の調査件数及び面積が激減しているが、教育委員会で行った発掘調査の件数については逆に過去最高の８件を越え９件にのぼり増加したという現象が生じた。これについては、平成７年度に調査対象区域の見直しを行ったことが影響したものと考えられる。その見直しの内容は、今まで「遺跡の存在する可能性が高い地域」でも発見が全く無かった地域を過去の調査成果により割り出し、その地域については「将来遺跡が発見される可能性がある地域」に変更したというものである。なお、平成９年度より、遺跡の現状保存を目的とするため、遺跡の盛土保存を適用とした制度を導入するに至っている。

平成12年度は27件の確認・発掘調査等を実施した。そのうち、志木市教育委員会が実施した発掘調査は２件で、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査は４件である。なお、盛土保存の対象は８件であった。

工事内容の内訳件数は、個人専用住宅14件、共同住宅６件、分譲住宅３件、店舗建設１件、区画整理事業１件、変電所増設工事１件、道路造成工事１件である。

第２章　田子山遺跡第69地点の調査

第１節　遺跡の概要

（１）立地と環境

田子山遺跡は、志木市本町２丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北東約1.3㎞に位置している。遺跡は、北東方向に新河岸川を臨む台地上に立地し、標高約15ｍの平坦部に南北約100ｍ、東西約500ｍの範囲に延び、面積は66,700㎡を測る。低地との比高差は約10ｍで、北側の台地縁辺は際立った断崖地形になっている。また、東側には大きな谷が入り込んでおり、本遺跡の東端は、この開析谷に面して分布する富士前・大原遺跡の延長上の遺跡であると考えられる。

遺跡の現況は、僅かに残っていた畑地においても平成５年以降、急速に進められたマンション・分譲住宅建設といった中規模開発によって、より一層宅地化が進行し、畑地・空地がほとんど見られない状況にある。

本遺跡は、昭和63年に第１回目の発掘調査が実施され、以後の調査から、縄文時代草創・早・中・後期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世、近代の複合遺跡であることが判明している。

（２）発掘調査の経過

確認調査は、平成12年４月24日に実施した。調査区域のほぼ南北方向に２本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、住居跡と考えられる遺構を２基

第２図　周辺の地形と調査地点（1／5000）　　平成13年12月28日現在

確認した。

そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行ったが、盛土保存を適用することができなかったため、止むを得ず教育委員会が発掘調査を実施することに決定した。

同日には、表土剥ぎによる排土をダンプに積載し、調査区外に搬出した。その作業は、翌25日の午後3時に終了した。その後の残土置場については、遺構の分布しない調査区域内に当てる予定とした。

人員導入による発掘調査は、25日の午後から開始した。まず、器材の搬入作業を行い、その後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を開始した。翌26日は雨天のため調査を中止にした。

27日、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を再開し、その結果、調査区域内には、縄文時代の集石（4S）、古墳時代後期の住居跡（61H）、平安時代の住居跡（62H）・溝跡（2M）が分布していることが明らかになった。その後、各遺構の精査を開始し、午後からは、61H・2Mから出土した土器を平板にドットで落とし、随時取り上げることにした。

28日、4Sの実測を開始する。2Mは掘りを終了し、その後写真撮影を行う。

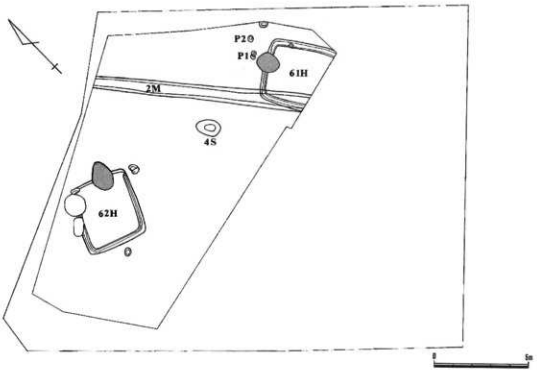
5月1日、61Hの床面が確認された。カマド周辺からは土器に加え、炭化材が多く検出されたことから、焼失住居であることが判明した。62Hは床面が確認され、壁溝を掘り始める。土器はカマド右横の住居北東コーナーから比較的まとまって出土している。

2日、61H・62Hは遺物出土状態の写真撮影を行い、その後実測を終了し、遺物を取り上げる。62Hはその後、カマドの実測を開始する。

8日、61Hは遺構の写真撮影を行い、その後平板測量を終了する。62Hはカマド実測を行う。

9日、61Hはカマドの実測を開始し、62Hはカマドの実測を終了する。4Sは実測を終了する。

10日、61Hのカマドの実測を終了し、その後写真撮影を行い、すべての精査を完了する。午後からは、器材搬出作業を行い、埋め戻しは翌11日に完了した。



第3図　遺構分布図（1／200）

第２節　検出された遺構と遺物

（１）集石

４号集石（第４図）

［構造］長径134cm・短径86cm・深さ25cmの楕円形の土坑を伴う。（礫の状態）土坑の中央部に密に詰まっており250個程の礫が出土した。被熱によると思われる破砕礫も多く確認された。（覆土）焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

［時期］縄文時代。

［所見］遺物として、土器が１点も出土しなかったため、時期を比定することはできなかった。

（２）住居跡

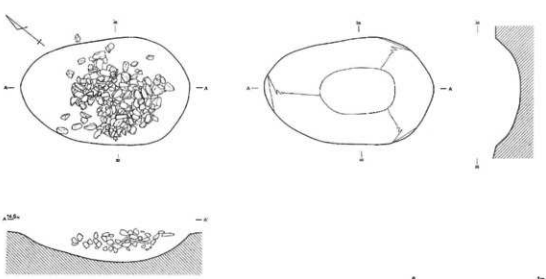
61号住居跡（第５～７図）

［住居構造］南東壁は調査区域外である。２号溝跡に切られる。（平面形）長方形。（規模）不明×3.54ｍ。（壁高）75～87cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できる範囲では、カマドを除いて全周する。上幅29～36cm・下幅11～20cm・深さ４～７cmを測る。（床面）ほぼ直床と思われ全体的にはしっかりしているが、カマドの右側に一部よく硬化した面が確認された。（カマド）北西壁の中央より、やや北コーナーに偏って位置する。主軸方位はＮ－37°－Ｗ・長さ123cm・幅95cm・壁への掘り込み45cmを測る。袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に粘土を被覆して構築している。煙道は70°程の勾配で立ち上がる。燃焼部は３cm程の掘り込みがあり、よく焼けている。粘土の残りは比較的に良好で、天井部は陥落した状態であった。（柱穴）検出されなかった。（覆土）11層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

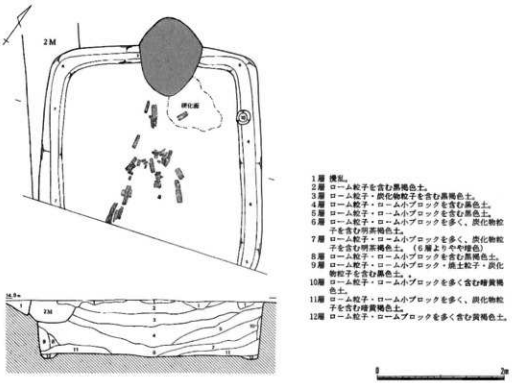
［遺物］土師器坏・甕が出土した。その他、炭化種子（ヤマモモ）が２個出土した。

［時期］古墳時代後期（７世紀後葉）。

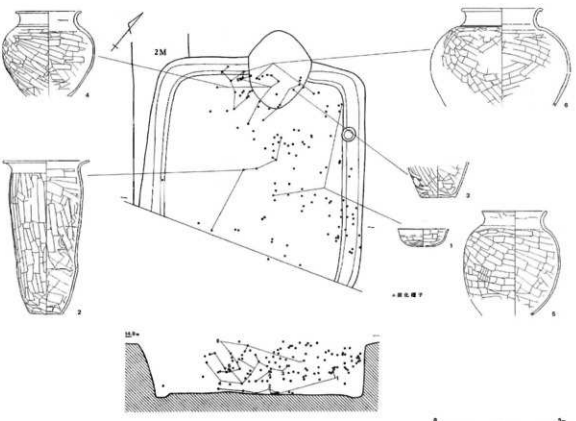
［所見］炭化材が床面上より多数検出されたことと、土器が特に住居東半部の覆土全体から散在して出



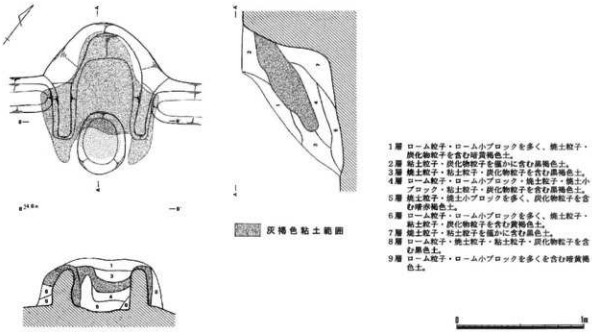
第４図　４号集石（1／30）



第５図　61号住居跡（1／60）



第６図　61号住居跡遺物出土状態（1／60・1／9）



第7図　61号住居跡カマド（1／30）

土することから、本住居跡は焼失後、東半部を中心に土器が廃棄された可能性がある。

61号住居跡出土遺物（第8図）

土師器坏形土器（1）

器高4.3㎝・口径12.0㎝。底部はやや平底気味で、体部は丸く、口縁部は僅かに外反する。色調は明橙色を呈し、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・金雲母・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。東壁寄りの床面上と覆土中からの出土で、遺存度は1／2程である。

土師器甕形土器（2～6）

2は器高37.0㎝・口径20.5㎝・底径7.6㎝。口縁部に最大径をもち、胴部は長胴でスリムである。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下外面は胴部上半から中位にかけてが縦方向、下半が斜方向にヘラ削り、内面はヘラナデが施される。住居中央付近のほぼ床面上から散在的に出土し、遺存度は2／3程である。

3は現器高7.7㎝・底径8.5㎝。長胴甕の胴部下半のみ2／3程遺存する。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。外面はヘラ削り後ヘラナデ、内面はヘラナデが施される。カマド内及び覆土中から散在的に出土する。

4は現器高20.7㎝・口径15.6㎝。胴部上半に最大径をもち、口縁部は大きく弓状に外反する。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ヘラナデされるが、胴部上半には未調整部分が観察される。内面はヘラナデが施される。カマド内及び覆土中から散在的に出土し、口縁部から胴部下半にかけて1／2程遺存する。

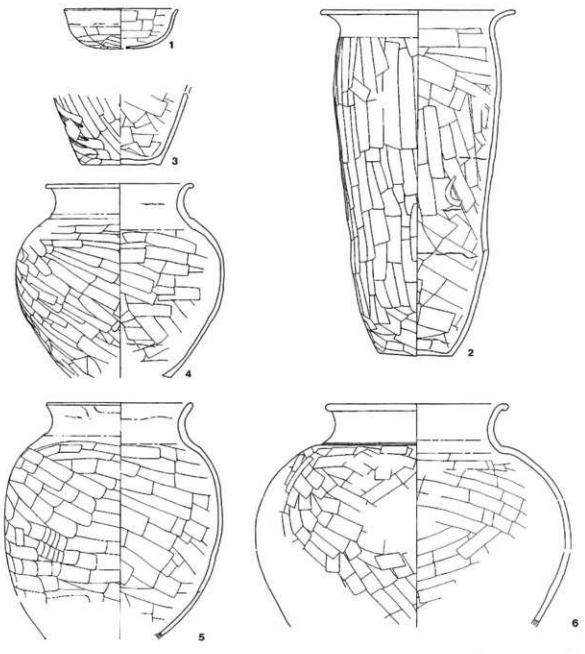
5は現器高25.3㎝・口径15.4㎝。4の土器に比べ、粗雑な作りのもので、胴部がやや長胴である。口縁部内外面と外面胴部上半を中心に黒色を呈していることから、黒色土器の可能性がある。胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りされるが、胴部上半には未調整部分が観察される。内面はヘラナデが施される。カマド左横の床面上35㎝浮いた覆土中からの

出土で、口縁部から胴部下半にかけて4／5強遺存する。

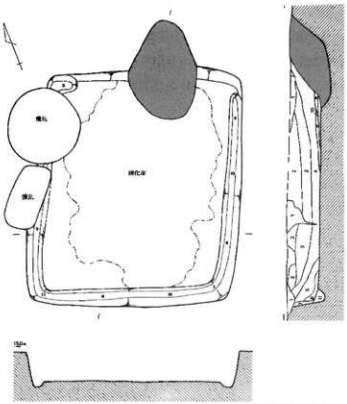
6は現器高23.8㎝・口径19.4㎝。胴部が大きく偏平した土器である。色調は明橙色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り、内面はヘラナデが施される。カマド内及び覆土中から散在的に出土し、口縁部から胴部下半にかけて1／2程遺存する。

62号住居跡（第9～11図）

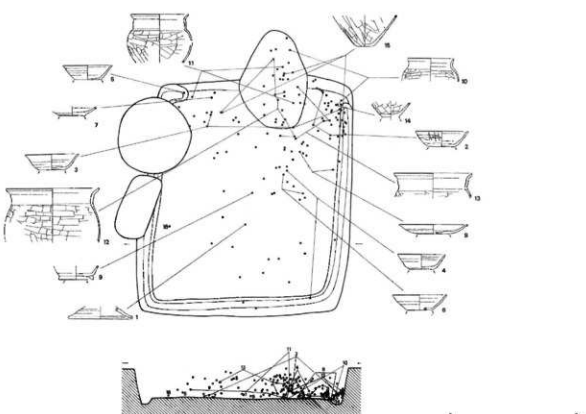
［住居構造］西壁の半分ほどは撹乱により壊されている。（平面形）長方形。（規模）3.77×3.36ｍ。（壁高）45～58㎝を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）北壁を除いて確認された。上幅20～30㎝・下幅9～12㎝・深さ5～12㎝を測る。（床面）ほぼ直床と思われ、壁際を除いて全体的によく硬化して



第8図　61号住居跡出土遺物（1／4）



第９図　62号住居跡（1／60）



第10図　62号住居跡遺物出土状態（1／60・1／9）

いる。（カマド）北壁の中央よりやや東に偏って位置する。主軸方位はN－22°－E・長さ160cm・幅106cm・壁への掘り込み85cmを測る。遺存状態は悪く、天井部と思われる灰褐色粘土が検出されるのみである。覆土中より甕の破片が多数出土している。煙道は50°程の勾配で立ち上がり、燃焼部は15cm程の掘り込みがあるが、焼けた面は確認できなかった。（柱穴）検出されなかった。（覆土）10層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

［遺物］須恵器坏、土師器甕などが多数出土した。

［時期］平安時代（９世紀中葉）。

62号住居跡出土遺物（第12図）

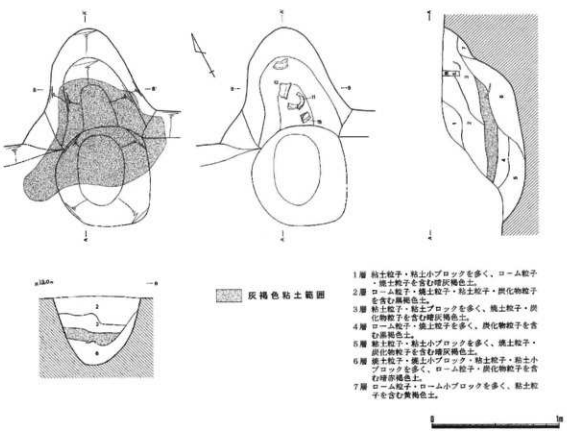
須恵器蓋形土器（１）

現器高30.0cm・推定口径15.0cm。口縁部は外面に幅７mmの面取りが施される。色調は暗灰褐色～淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。住居中央付近の床面上７cm浮いた覆土中からの出土で、天井部中位から口縁部にかけて1／8程遺存する。

須恵器坏形土器（２～７）

２は器高3.8cm・口径12.6cm・底径6.2cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は口縁部付近が暗灰褐色、体部から底部にかけては暗茶褐色を呈し、胎土には白色針状物質・砂粒を含む。体部外面には細線による意味不明な線刻が描かれている。カマド右横の床面上８～20cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は3／4程である。

３は器高3.8cm・口径12.8cm・底径6.4cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色



第11図　62号住居跡カマド（1／30）

調は暗灰褐色を基調とし、底部のみ暗茶褐色を呈する。胎土には砂粒・小石（最大８㎜程）を含む。カマド前面の覆土中から散在的に出土し、遺存度は4／5強である。

４は器高3.7㎝・推定口径11.4㎝・推定底径5.8㎝。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗青灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。２点の破片が覆土中から散在して出土し、遺存度は1／5程である。

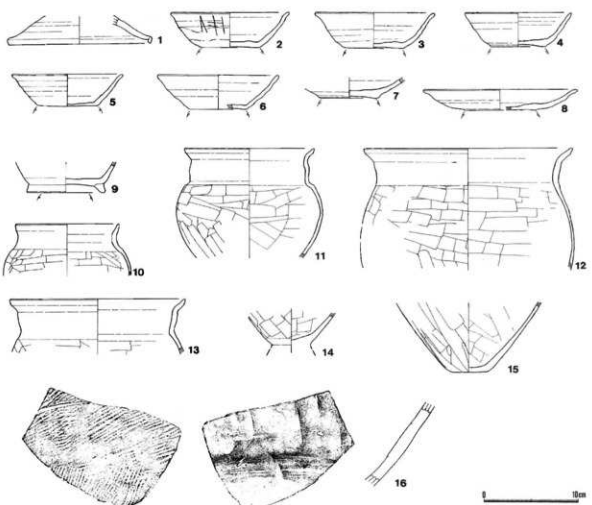
５は器高3.5㎝・口径11.8㎝・底径6.4㎝。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を多く含む。住居北西コーナーの床面上８㎝浮いた覆土中から出土で、遺存度は1／2程である。

６は器高3.8㎝・推定口径12.9㎝・推定底径6.0㎝。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を多く含む。２点の破片が住居中央付近の覆土中から出土し、遺存度は1／5程遺存する。

７は現器高2.3㎝・底径6.4㎝。底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を多く含む。カマド左横の床面上からの出土で、底部のみ遺存する。

須恵器皿形土器（８）

器高2.3㎝・推定口径16.4㎝・推定底径7.5㎝。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。



第12図　62号住居跡出土遺物（1／4）

色調は黄褐色を呈し、胎土には暗茶褐色粒子・砂粒を含む。2点の破片が住居東壁近くのほぼ床面上から散在して出土し、遺存度は1／4程である。

須恵器壺形土器（9）

現器高3.3㎝・推定底径8.3㎝。高台付きの長頸瓶であろうか。底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。住居中央の床面上5㎝浮いた覆土中からの出土で、底部のみ遺存する。

土師器甕形土器（10～15）

10は現器高5.6㎝・推定口径11.0㎝。胴部は球状を呈し、口縁部はやや内湾気味に開く。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。カマド内及び覆土中から散在的に出土し、口縁部から胴部上半にかけて1／2程遺存する。

11は現器高11.8㎝・推定口径13.8㎝。胴部上半に最大径をもち、口縁部は「コ」の字状を呈する。色調は暗茶褐色～黒褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。カマド内及び覆土中から散在的に出土し、口縁部から胴部下半にかけて1／2程遺存する。

12は現器高13.2㎝・口径22.2㎝。胴部上半に最大径をもち、口縁部は「コ」の字状を呈する。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。カマド内及び覆土中から散在的に出土し、口縁部から胴部中位にかけて1／2程遺存する。

13は現器高6.0㎝・推定口径18.7㎝。12の土器に類似する。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。カマド右横の覆土中から散在的に出土し、口縁部から胴部上半にかけて1／4程遺存する。

14は現器高4.7㎝。胴部下半から脚台部にかけての破片である。色調は黒褐色～暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。11の土器と同一個体である可能性がある。内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。カマド右横の床面上からの出土である。

15は現器高7.6㎝・底径3.8㎝。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。12の土器と同一個体である可能性がある。カマド内及び覆土中から散在的に出土し、胴部下半から底部にかけて2／3程遺存する。

須恵器甕形土器（16）

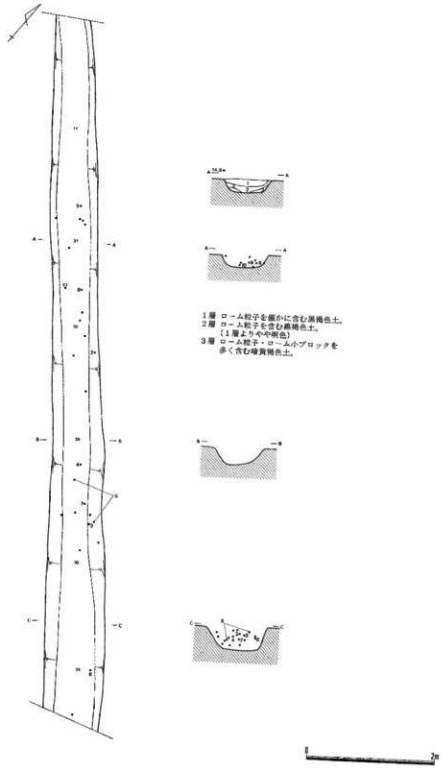
大型甕の胴部破片である。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。内面には当て道具痕、外面には叩き目痕が残る。西壁近くのほぼ床面上からの出土である。

（3）溝跡

2号溝跡（第13図）

［構造］61号住居跡を切る。平成5年度調査の25地点の2号溝跡に続くと考えられる。N－20°－Wの走行角度をもち、今回確認できた範囲では長さ11m40㎝・上幅54～96㎝・下幅40～62㎝・深さ17～34㎝を測る。溝底はほぼ平坦で、北西側の方が浅くなっている。覆土は黒褐色土を基調とし3層に分かれる。

［遺物］須恵器坏・壺、土師器甕の小破片が覆土中から出土している。



第13図　2号溝跡（1／60）

［時期］平安時代（９世紀後葉以降）。

２号溝跡出土遺物（図版５－１～11）

すべて小破片のため、実測はできなかった。出土土器の総数は103点。

須恵器坏形土器（１～５）

１～３は口縁部小破片である。１は色調が灰白色を呈し、胎土には白色針状物質・砂粒を含む。２は色調が灰色を呈する。胎土は精錬されており、砂粒をほとんど含まない。３は色調が暗灰褐色を呈し、胎土には白色針状物質を多く含む。４は体部小破片で、色調は灰色を呈し、胎土には砂粒を含む。５は底部小破片で、色調は灰色を呈し、胎土には砂粒を含む。

須恵器壺形土器（６・７）

６・７は体部小破片で、６は色調が暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。７は色調が灰褐色を呈し、胎土には黒色粒子・砂粒を含む。底部内面には自然釉がかかっている。

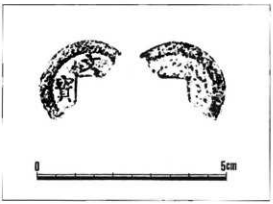
土師器甕形土器（８～11）

すべて長甕の小破片で、８は底部付近、９～11は胴部である。８は色調が暗橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。９・10は色調が明橙色を呈し、胎土には暗茶褐色粒子・砂粒を含む。11は暗黄褐色を呈し、胎土には暗茶褐色粒子・砂粒を含む。調整はすべて、内面がヘラナデ、外面がヘラ削りである。

（４）遺構外出土遺物（第14図）

銅銭が１点出土した。

文久永宝と考えられる。外径2.65㎝。重さ1.1ｇ。初鋳1863年。



第14図　遺構外出土遺物（1／1）

第３章　西原大塚遺跡第47地点の調査

第１節　遺跡の概要

（１）立地と環境

西原大塚遺跡は、志木市幸町３丁目を中心に広がる面積約231,400㎡の市域最大規模の遺跡である。

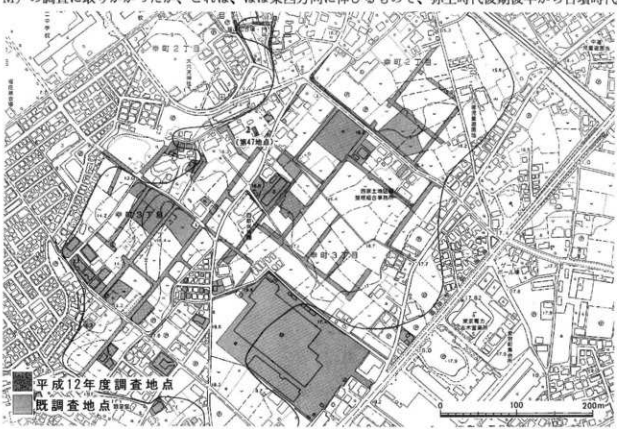
遺跡は北西に柳瀬川を臨む台地上にあり、標高は遺跡南端で約19ｍ、北端で約14ｍを測り、北西方向に徐々に傾斜しているが、おおむね平坦である。台地下の柳瀬川に開析された低地は標高約８ｍで、崖下には小規模な湧水地が認められる。遺跡の現況は多くが畑地であるが、現在、この地区で土地区画整理事業が進展中であり、今後、住宅建設を始めとする各種開発行為の増加が予測される。

本遺跡は、昭和48年に最初の発掘調査が行われて以来、志木市教育委員会・志木市史編さん室・志木市遺跡調査会が調査を実施してきていて、その件数は確認調査を含めて80件を超える。その結果、縄文時代中期後半、弥生時代後期後半、古墳時代前期前半を中心にして、旧石器時代、縄文時代前・後・晩期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世を含んだ集落跡であることが知られてきている。

（２）発掘調査の経過

発掘調査は、平成12年４月３日から開始した。

前年度に実施した確認調査の際に表土の除去作業を行っていたため、すでに確認されていた溝跡（25Ｍ）の調査に取りかかったが、これは、ほぼ東西方向に伸びるもので、弥生時代後期後半から古墳時代



第15図　周辺の地形と調査地点（1／5000）　　平成13年12月28日現在

前期前半にかけてのものであることが判明した。

4日には25Mに切られた土坑（378D）を検出し調査を行った。これらの遺構の写真撮影・測量の終了後、埋め戻しを行い発掘調査を終えた。

第2節　検出された遺構と遺物

378号土坑（第17図）

［構造］25Mに切られる。（平面形）円形？（規模）不明×75㎝・深さ35㎝を測る。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。

［覆土］1層－ローム粒子を多く含み、炭化物粒子を僅かに含む硬質の黒褐色土（10YR3／2）、2層－ローム粒子を僅かに含み、炭化物粒子を多く含む硬質の黒褐色土（7.5YR3／1）。

［遺物］縄文時代中期後半の土器小破片が2点出土した。図示できる遺物はなかった。

［時期］出土遺物と覆土の状態から、縄文時代中期後半の所産と考えられる。

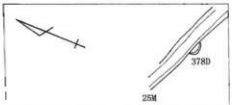
25号溝跡（第17図）

［構造］378Dを切る。東側は調査区外に、西側は破壊されている。N－70°－Wの方向に走行する。上幅75～90㎝・下幅40～50㎝・深さ20～40㎝を測る。溝底はほぼ平坦で、断面形は逆台形状を呈する。

［覆土］1層－ローム粒子を僅かに含む締まりのある黒褐色土（7.5YR3／1）、2層－ローム粒子を多く含む粘性のある黄褐色土（10YR5／6）。

［遺物］覆土中から僅かに出土した。

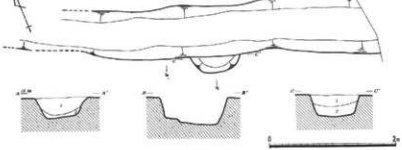
［時期］出土遺物と覆土の状態から、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけての所産と考えられる。

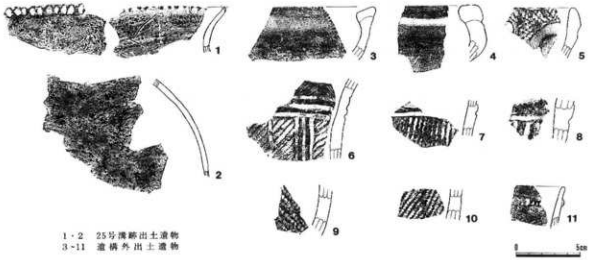


第16図　遺構分布図（1／200）

25号溝跡出土遺物（第18図1・2）

1・2は甕形土器で同一個体と思われる。1はゆるやかに外湾する口縁部破片。口唇部には木口を利用した刻みが加えられるが、押捺の力が強かったため口唇端部は波打つ形状になる。外面はヘラナデ、内面は丁寧にヘラミガキされる。色調は明赤褐色（2.5YR5／6）から黒褐色（5YR2／1）を呈する。2は体部上位の破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を僅かに残す。内面は丁寧にヘラミガキされる。色調は黒褐色（5YR2／1）を呈し、内面には部分的に炭化物が付着


第17図　378号土坑・25号溝跡（1／60）



第18図　25号溝跡・遺構外出土遺物（1／3）

する。胎土は砂粒を僅かに含むが緻密である。

遺構外出土遺物（第18図3～11）

3～10は縄文時代中期後半の土器。

3は無文の口縁部破片。口縁部は内湾し、口唇部は僅かなくびれをもち短く外反する。色調はにぶい赤褐色（5YR5／4）を呈し、胎土には雲母片を多く含む。

4は浅鉢形土器になろうか。口頸部は内湾する。口唇部下には凹線が巡る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR／4）を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

5はＲＬの単節斜縄文を羽状に施し地文とする。太沈線により「∩」字状の区画が描かれようか。色調は褐灰色（7.5YR4／1）を呈し、胎土には砂粒のほかに雲母片・輝石を僅かに含む。

6はキャリパー形土器の頸部から胴部にかけての破片。頸部は無文帯になり3条の横走する沈線で胴部と区画する。胴部はＲＬの単節斜縄文を地文とし、3条の平行する沈線と僅かに蛇行する単沈線が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR4／2）を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。

7は平行する沈線が巡り、Ｌの撚糸文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4／2）を呈し、胎土には砂粒を含む。

8は横位の沈線が巡り、そこから斜位の沈線が平行して施される。色調は灰褐色（5YR4／2）を呈し、胎土には砂粒を含む。

9・10はＲＬの単節斜縄文が施される。9の色調は褐灰色（7.5YR4／1）を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。10の色調はにぶい褐色（7.5YR5／4）を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。

11は縄文時代後期前半の土器。

口縁部に沿って刻みが加えられた細い隆帯が巡る。色調は褐灰色（7.5YR4／1）を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。

第４章　まとめ

本書は、平成12年度に国庫補助事業として、確認調査及び発掘調査等を実施した計27地点の調査成果を収録したものである。そのうち発掘調査を実施したのは、田子山遺跡第69地点と西原大塚遺跡第47地点の２地点であった。本稿では、比較的に遺構・遺物が良好な状態で検出された田子山遺跡第69地点について、調査所見をまとめることにしたい。

１．田子山遺跡第69地点

本地点からは、縄文時代の集石１基、古墳時代後期の住居跡１軒、平安時代の住居跡１軒・溝跡１条が検出されている。ここでは、古墳時代後期の61号住居跡と平安時代の62号住居跡に絞って若干の考察を試みたい。

(1)　古墳時代後期の61号住居跡について

まず、61号住居跡の基本構造であるが、規模・平面プランは、およそ3.5ｍ前後の長方形、北西壁にはカマドが設置されている。床面までの深さは、確認面であるローム面から80㎝前後を測り、耕作による攪乱も受けず非常に安定した遺存状態を保持している。カマドについても構造を復原するには至らなかったが、比較的に遺存状態が良好で、灰褐色粘土が袖部のみならず天井部にも被覆していることが確認できた。カマドの袖部基盤は、ロームを高さ15㎝程に掘り残し、馬蹄形状に作出されており、煙道部に相当する壁への掘り込みは45㎝と未発達なもので、市内では一般的なタイプと言える。カマド内に土器及び支脚は設置されていなかった。

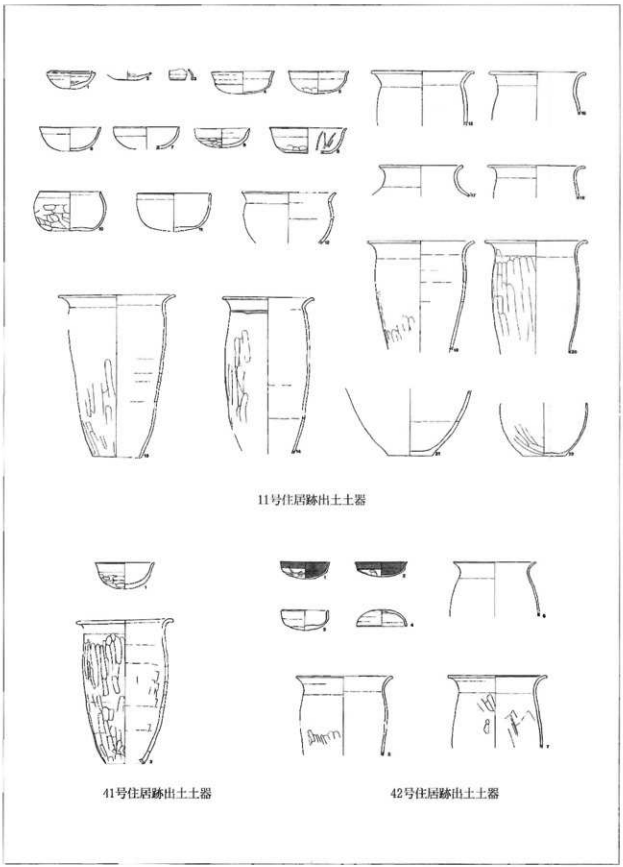
また、本住居跡は、床面上から多くの炭化材が出土したことから、焼失住居であると考えられる。さらに、土器が覆土中特に住居東半部から散在的に出土していることを加えると、本住居跡は焼失後、住居東半部を中心に土器が廃棄され、同時に人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。

次に、出土遺物については、土器が主体であり、その他として、炭化種子（ヤマモモ）が２点出土している。土器は、すべて土師器で、器種としては、坏・甕形土器に分類される。ここでは、本住居跡出土の土器について、過去に報告書が刊行されている田子山遺跡出土の資料（第19・20図）を参考に考えることにする

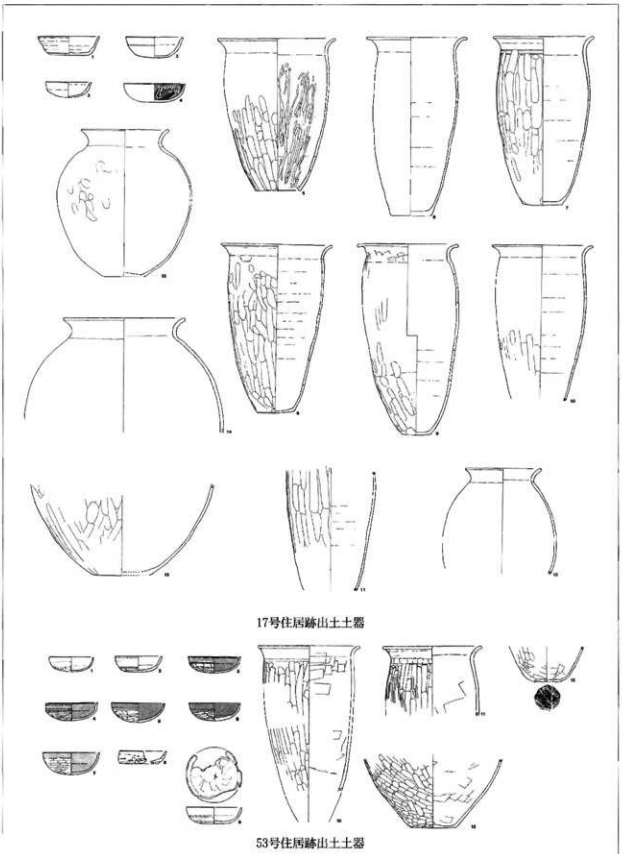
坏形土器は、口径12.0㎝の無彩土器（第８図１）１点である。この土器は、口縁部と底部の境に僅かに稜をもつもので、有段坏の形骸化した特徴として看取される。類似するものとして、本遺跡では、第５地点11号住居跡（第19図９）・第13地点17号住居跡（第20図２）・第48地点53号住居跡（第20図９）が挙げられる。この類は、現時点において、甕形土器の長胴化が完成した６世紀後半の段階に出現し、８世紀前半には消滅するものと考えられる。変化の傾向として、７世紀前葉以降は口径12～13㎝のものを基本とし、中葉ではやや小型化の傾向がみられ、７世紀後葉には10㎝未満の最小化したものが加わり、法量の分化が明確になるものと考えられている（尾形1988・2000）。

所沢市東の上遺跡を分析した根本　靖氏によると、この類はＣ類とした「在地の色濃い土器」に該当する。根本氏によれば、この類は１期（７世紀第４半紀）のみに限定され、８世紀以降は「新たなる土師器の類と須恵器が増える段階」の中で消滅するものと考えられている（根本2001）。

志木市においても現時点では、６世紀後半から７世紀全般の推移の中で把握することができ、筆者は、



第19図　田子山遺跡の古墳時代後期の土器集成１（1／8）



第20図　田子山遺跡の古墳時代後期の土器集成２（1／8）

この類を「砂粒・金雲母を含む胎土やヘラ削り痕を顕著に残す特徴など当地域の甑・甕形土器に類似するものである。おそらく、この類は甑・甕形土器と同様に日常頻繁に使用される雑器として、集落から比較的に近距離の範囲の中に生産地があり、消費者がすぐ手に入れられるものであった」と考えている(尾形2000)。

甕形土器については、大きく長甕（第８図２・３）２点と丸甕（第８図４～６）３点に分類される。

まず、長甕は、口縁部に最大径をもち、非常に薄手の土器である。これに類似する土器として、本遺跡では第５地点11号住居跡（第19図19・20）・第13地点17号住居跡（第20図６～８・10）・第29地点42号住居跡（第19図５）・第48地点53号住居跡（第20図10）が挙げられる。長甕の長胴化については、すでに志木市中野遺跡において、２期（６世紀前葉）で「く」の字口縁の消滅などの口縁部形態の変化に関連し、長胴化の兆しのあるものが出現しており、さらに長胴化の完成したものは、４期（６世紀後葉）で出現し、５期（７世紀前葉）では、すべて長胴化の完成したものに収束されていることが分析されている（尾形2001b）。

こうした傾向の中、筆者は口縁部に最大径をもつ本例のようなタイプは、以下のように長胴化が完成した長甕の段階的な形態変化の中で把握することができるものと考えている。

１段階－胴部に最大径をもつタイプのみが存在する段階。

２段階－胴部に最大径をもつタイプと口縁部に最大径をもつタイプが共伴する段階。

３段階－口縁部に最大径をもつタイプのみが存在する段階。

４段階－口縁部に最大径をもつタイプと武蔵型甕のプロトタイプとするものが共伴する段階。

５段階－口縁部に最大径をもつタイプと武蔵型甕が共伴する段階。

６段階－武蔵型甕のみが存在する段階。

この中で、１段階目については、本遺跡では確認されていない。志木市では城山・中道・西原大塚遺跡で確認されており、共伴する須恵器にＴＫ43～ＴＫ209型式の坏身・蓋などがあることから、実年代的には６世紀後葉～７世紀中葉に比定される。

２段階目の良好な資料としては、11・17・42・53号住居跡がある。須恵器の共伴例では、11号住居跡から湖西Ⅲ期第１小期の坏蓋・身（第19図１～３）、42号住居跡から湖西Ⅲ期第１小期の坏蓋（第19図４）が出土している（後藤1989）。この段階では、まだ南比企窯・東金子窯産の製品は共伴していない。また、17号住居跡からは畿内系暗文土器（第20図４）、53号住居跡からは比企型坏（第20図３・４）・続比企型坏（第20図５～７）が出土している。実年代的には７世紀後葉～末葉に比定される。

３段階目としては、本遺跡及び市内に良好な例はないが、近隣では富士見市殿山遺跡（栗原1977）がある。この段階では、鳩山窯跡群ⅡＢⅠ・Ⅱ期に比定される須恵器坏、北武蔵型坏などが共伴している。実年代的には７世紀末葉～８世紀初頭に比定される。

４・５段階目は現時点において、市内では皆無であるが、近隣では富士見市北通遺跡（和田1992）、所沢市東の上遺跡（飯田1986）、上福岡市ハケ遺跡（笹森・成瀬他1979）・滝遺跡（笹森・高木1980）に類例を求めることができる。この段階には、鳩山窯跡群ＨＢⅡ・Ⅲ期に比定される須恵器坏が共伴していることから、実年代的には８世紀前葉～中葉に比定される。なお、武蔵型甕のプロトタイプとするものと武蔵型甕の関係については、前者が特に「く」の字形の口縁部をもつものと使用される場合が多いが、この類についても胎土・調整技法の類似性から、武蔵型甕の範疇で把握しても可能ではないかと考えられる。武蔵型甕が９世紀中葉以降に「コ」の字口縁のものが新たに出現するのと同じように、この

類も形態変化の推移の中での一形態とみるべきであろう。

6段階目は、すでに武蔵型甕に収束される段階で、東の上遺跡を分析した根本氏によれば、Ⅳ期（8世紀後半）以降の特徴として把握することができる（根本1999）。

次に丸甕については、最大径を胴部上半にもち、特に第6図4の土器は大型のもので、胴部上半に強い張りをもち、口縁部に歪みがあるなど粗雑な作りのものといえる。これについては、志木市城山遺跡（尾形1988）において、Ⅵ・Ⅶ期に大型化の傾向と胴部上半の強い張りが指摘されており、こうした特徴が本住居跡出土の丸甕に合致している。

以上のように、本住居跡出土の土師器坏形土器と甕形土器は、その特徴から、7世紀後葉の範疇で捉えることが可能であろう。

最後に、今までに田子山遺跡で検出され報告された古墳時代後期の土器（第19・20図）を時期ごとに遺構名で表わすと以下のようにまとめることができる。

1期（7世紀中葉）－41号住居跡

2期（7世紀後葉）－11・42・53号住居跡

3期（7世紀末葉）－17号住居跡

(2) 平安時代の62号住居跡について

62号住居跡は、3.77×3.36mの方形プランを呈し、北壁にカマドをもつ概して小型の住居跡である。床面までの深さは、確認面であるローム面から50cm前後を測る。カマドは、全体に崩落しているものと思われ、灰褐色粘土が住居内に流れ込んでいる状態で検出された。さらに、カマド袖部基盤が前述した61号住居跡と違い、ロームを掘り残してはいないタイプであるため、どこまでが袖部構造を示す粘土であるのか、天井部がどこからか、など細部構造を解明するには至らなかったと言える。壁への掘り込みは85cm、煙道部は50°の勾配をもち立ち上がっている。

本住居跡は、土器の出土状態から、カマド右横を中心に土器が廃棄され、同時に埋め戻された可能性がある。

次に出土遺物については、すべて土器であった。土器は須恵器・土師器に分類され、さらに、須恵器は坏・椀・皿・蓋・壺・甕形土器、土師器は甕形土器で構成される。ここでは、出土土器の時期を考えることにする。

まず、須恵器坏・椀・皿形土器（第12図2～6）であるが、特に坏形土器（2～6）については、2の土器が胎土中に白色針状物質を多く含むことから、南比企窯跡群の製品と特定することが可能であろう。その他については、東金子窯跡群の製品と思われる。時期については、6の土器が口径―底径比1／2を越えるのみで、その他はほぼ1／2に近いことから、大まかに鳩山編年では、ⅡＢⅦ期（9世紀中葉）に比定される（渡辺1990）。

土師器甕形土器（第12図10～15）については、すべて武蔵型甕と呼ばれるもので、さらに小型甕（10・11・14）、大型甕（12・13・15）に分類される。両者の特徴は、すべて「コ」の字口縁を呈することで共通するが、比較的に大型甕は頸部と胴部の境の横ナデにより作出された段が弱い傾向にある。時期については、根本編年（根本1999）によるⅥ期（9世紀中葉）に比定され、前述した須恵器坏形土器の時期に一致する。

以上のように、本住居跡出土の須恵器坏形土器と土師器甕形土器は、9世紀中葉に比定できるものと考えられる。

[引用・参考文献]

飯田充晴　1986『東の上遺跡』所沢市文化財調査報告書第18集－2

尾形則敏　1988「第Ⅱ章　第2節　古墳時代後期の土器」『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集　志木市遺跡調査会

1995　第3章　H子山遺跡第29地点の調査」『志木市遺跡群Ⅵ』志木市の文化財第21集　志木市教育委員会

1996　第10章　田子山遺跡第13地点の調査」『城山遺跡第12地点　城山遺跡第13地点　西原大塚遺跡第14地点　中野遺跡第11地点　中野遺跡第16地点　市場裏遺跡第1地点　田子山遺跡第10地点　中遺遺跡第21地点　田子山遺跡第13地点　西原大塚遺跡第21地点　市場裏遺跡第2地点　中遺遺跡第26地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集　志木市遺跡調査会

2000「志木市における古墳時代の土師器の編年(1)－5世紀から7世紀の坏形土器の変遷－」『あらかわ』第3号　あらかわ考古談話会

2001a　志木市における古墳時代の土師器の編年(2)－5世紀から7世紀の甕・甕形土器の変遷－」『あらかわ』第4号　あらかわ考古談話会

2001b「第4章　まとめ」「埋蔵文化財調査報告書2」志木市の文化財第31集　埼玉県志木市教育委員会

尾形則敏・深井恵子　1999「第5章　田子山遺跡第48地点の調査」『志木市遺跡群9』志木市の文化財第27集　埼玉県志木市教育委員会

栗原文蔵　1977『殿山』埼玉県遺跡調査会　富士見市教育委員会

後藤健一　1989「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会

佐々木保俊　1992「第4章　田子山遺跡第4地点の調査」『中遺遺跡第12地点　中遺遺跡第13地点　田子山遺跡第4地点　田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集　埼玉県志木市教育委員会

笹森健一・成瀬正和他　1979「ハケ遺跡C地点」上福岡市ハケ遺跡調査会

笹森健一・高木文夫　1980『埋蔵文化財の調査（Ⅱ）』郷土史料第24集　上福岡市教育委員会

根本　靖　1999「所沢市東の上遺跡の基礎研究　Ⅱ－土師器赤彩の変遷について－」『あらかわ』第2号　あらかわ考古談話会

2001「東の上遺跡の基礎研究　Ⅳ－7世紀後半から8世紀の坏形土器の変遷－」『あらかわ』第4号　あらかわ考古談話会

和田晋治　1992「第4章　北通遺跡第40地点」『富士見市遺跡群X』富士見市文化財報告第42集　埼玉県富士見市教育委員会

渡辺　一　1988「鳩山窯跡群Ⅰ」鳩山窯跡群遺跡調査会　鳩山町教育委員会

1990「鳩山窯跡群Ⅱ」鳩山窯跡群遺跡調査会　鳩山町教育委員会

1991「鳩山窯跡群Ⅲ」鳩山窯跡群遺跡調査会　鳩山町教育委員会

1992「鳩山窯跡群Ⅳ」鳩山窯跡群遺跡調査会　鳩山町教育委員会

図　　版

1．調査区近景

2．確認調査風景

3．4号集石調査風景

4．4号集石

5．61号住居跡発掘風景

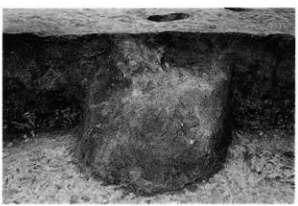
6．61号住居跡遺物出土状態

7．61号住居跡遺物出土状態

8．61号住居跡遺物出土状態

1．61号住居跡炭化材出土状態

2．61号住居跡



3．61号住居跡カマド

4．61号住居跡カマド（掘り方）

5．62号住居跡遺物出土状態

6．62号住居跡遺物出土状態

7．62号住居跡遺物出土状態

8．62号住居跡遺物出土状態

1．62号住居跡カマド

2．62号住居跡カマド土層断面

3．62号住居跡カマド遺物出土状態

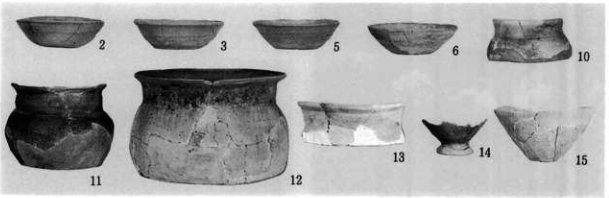
4．62号住居跡カマド遺物出土状態

5．発掘風景

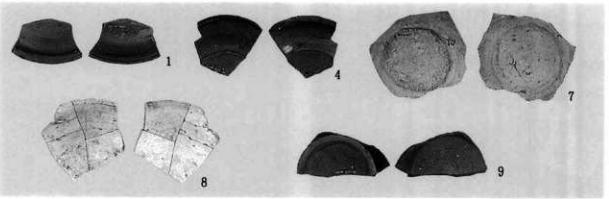
6．2号溝跡発掘風景

7．2号溝跡

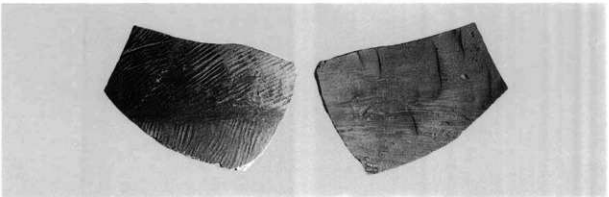
1．61号住居跡出土遺物



2．62号住居跡出土遺物1



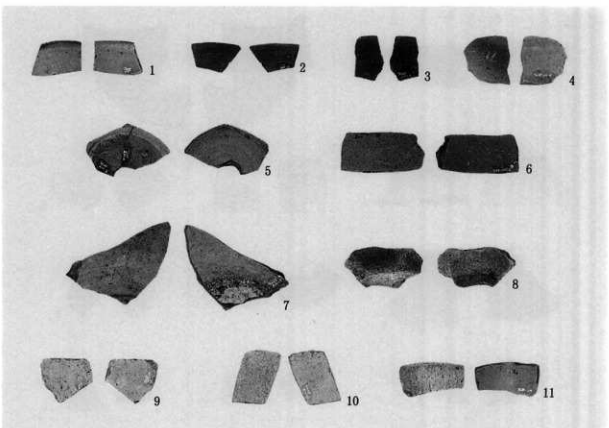
3．62号住居跡出土遺物2



1．62号住居跡出土遺物3

2．線刻土器　62H－2

3．遺構外出土古銭



4．2号溝跡出土遺物

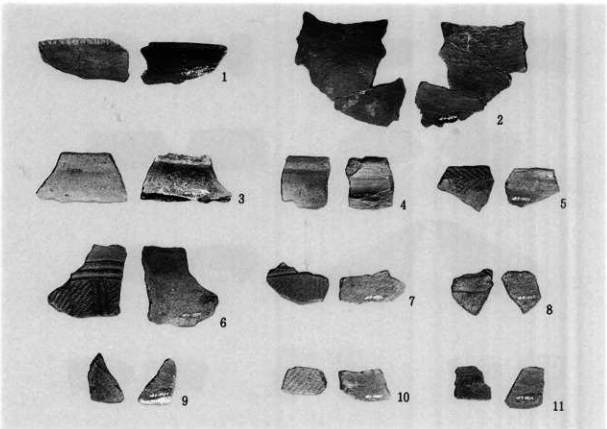
図版6　西原大塚遺跡第47地点

1．調査区近景

2．発掘調査風景

3．378号土坑

4．25号溝跡



5．25号溝跡・遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しきしいせきぐん		
書名	志木市遺跡群 12		
副書名		巻次	
シリーズ名	志木市の文化財	巻次	第32集
編著者名	尾形則敏　佐々木保俊　深井恵子		
編集機関	埼玉県志木市教育委員会		
所在地	〒353－0002　埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号　TEL 048(473)1111		
発行年月日	平成14(2002)年2月28日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (°′″)	東経 (°′″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
田子山遺跡 (第69地点)	志木市本町 2丁目1726－1	11228	010	35° 49′ 38″	139° 35′ 10″	20000425 ～ 20000511	121.32	個人専用住宅
西原大塚遺跡 (第47地点)	志木市幸町 3丁目3153－1・3	11228	007	35° 49′ 16″	139° 34′ 00″	20010403 ～ 20010404	86.12	個人専用住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田子山遺跡 (第69地点)	集落	縄文時代 古墳時代後期 平安時代	集石　1基 住居跡　1軒 住居跡　1軒 溝跡　1条	土師器 土師器・須恵器 土師器・須恵器	
西原大塚遺跡 (第47地点)	集落	縄文時代中期 弥生時代後期～ 古墳時代前期	土坑　1基 溝跡　1条	土器小片	

志木市の文化財　第32集

志木市遺跡群12

発　行　埼玉県志木市教育委員会
　　埼玉県志木市中宗岡１丁目１番１号
発行日　平成14（2002）年２月28日